

ユリイカ

Eureka

詩と批評

特集

世界文学入門

この十年間の動向をさぐる

アメリカ＝志村正雄／フランス＝滝田文彦／イギリス＝出淵博

ドイツ＝丸山匠／イタリア＝千種堅／ポーランド＝工藤幸雄

ソビエト＝川崎浹／アフリカ＝土屋哲／中国＝松井博光

オーストラリア＝越智道雄／ラテン・アメリカ＝木村栄一

資料＝読書案内



ユリイカ

Eureka
詩と批評

特集

世界文学入門

この十年間の動向をさぐる

アメリカ＝志村正雄／フランス＝滝田文彦／イギリス＝出淵博

ドイツ＝丸山匠／イタリア＝千種堅／ポーランド＝工藤幸雄

ソビエト＝川崎浹／アフリカ＝土屋哲／中国＝松井博光

オーストラリア＝越智道雄／ラテン・アメリカ＝木村栄一

資料＝読書案内



マヤ神話

—チラム・バラムの予言—

ル・クレジオ 原訳・序

望月芳郎訳



〈野蜂の神〉〈羽毛の蛇の神〉ヘトウモロコシの若い神などのユニークな神々をもち、巧緻で壮大な曆を発見したマヤ民族の社会と文明。その創世からスペイン人による侵略までを描くマヤ最大の文献「チラム・バラムの予言」。他に「カトゥンの予言」「年の予言」「年代記」等を収めた我国への初紹介。精密な考証、注による力作。

▼発売中・定価1700円

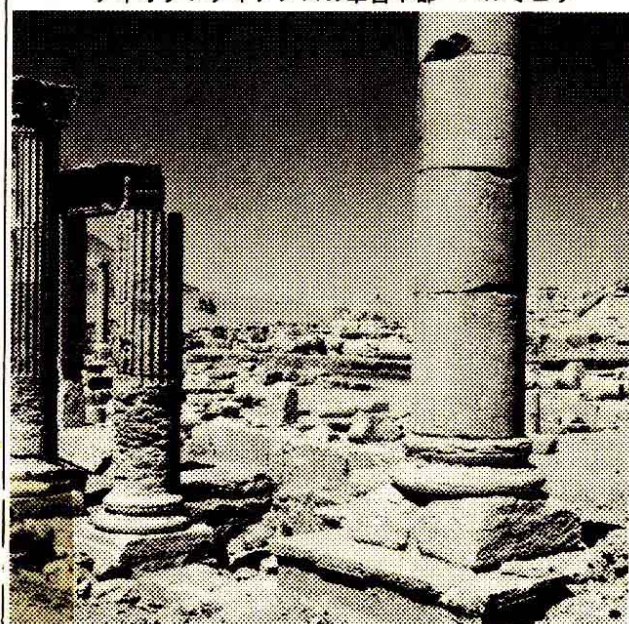
写真集 隊商都市

並河萬里

▼発売中・定価1万円

現在にも通じるカラフルな織物の断片。見事な壁画、彫刻。類例のない壮大な建築群。神殿、市場、列柱道路、軍営……。絹の道と香料の道が交差し、紀元前一世紀から三世紀まで空前の繁栄を誇った隊商都市パルミューラを克明に再現しながら、隊商国家を築き上げた女王ゼノビアの栄光と悲惨を描出する、世界で初めての写真集。

ディオクレティアヌスの軍営本部 パルミューラ



晶文社 東京都千代田区
外神田2-1-12

ヨーロッパの批評言語

篠田一士 サント・ブーヴ、クルチウス、エリオット
……近代批評の巨星たちの骨法を論じ、批評文学の醍
醐味を語る、近代批評へのこよなき入門。二〇〇〇円

教育としての遊び

W・ベンヤミン 丘澤静也訳 絵本、おもちゃ、人形
「子どもたちにとつての「遊び」と「学び」の関係
をいさいきと捉えかえす先駆的な教育論。一三〇〇円

島尾敏雄全集第11巻

全17巻 意識下に生起するもうひとつの現実——島
尾文学の原基のイメージにみちた夢の記録。「記夢志」
と「夢日記」の二篇を収録。第9回配本／二六〇〇円

リトル・セックス

H・ハンセン 奥田・木村訳 デンマークの少年と少
女たちの性をストリートに描き、若い人々の共感を呼
んだ話題作。ダウンタウン・ブックス／二二〇〇円

海まで100マイル

佐藤秀明・片岡義男 ハワイやオーストラリアをはじ
め、世界中の海岸に美しい波をもとめて旅する男たち
が作った、海と波とサーフィンの写真集。一九〇〇円



創林社 〒101 東京都千代田区三崎町2-12-2 電話265-8077 振替東京0-26545

立原正秋 人と文学

武田勝彦編 清冽な全生涯を辿る初の本格的な作品論集。
〔執筆〕井上靖、吉行淳之介、小川国夫、三浦哲郎、吉
田精一、長谷川泉、桶谷秀昭ほか全書下し 一六〇〇円

立原正秋伝

武田勝彦著 幼き日に父の自裁に会い、母と訣れた孤絶の
少年期を経て、文学と恋と剣に生きた〔冬の作家〕の生涯
に迫る書き下ろし評伝。付年譜 一二〇〇円

円地文子の世界

亀井秀雄・小笠原美子著 女の性の深淵を妖艶に描く現代
女流第一人者の初の評伝と作家論。 既刊 一六〇〇円
瀬戸内晴美の世界 小久保実編著 一二〇〇円

石坂洋次郎の文学

森英一著 常識的、通俗的であると文学的にタメを押さ
れつけてきた石坂文学の成立の拠点をあざやかに照射し、
その生涯の展開を追う初の論考。 一六〇〇円

長塚節の短歌

市村与生著 子規との出会いから左千夫との論争を経て、
〔秋の歌人〕としての高みに迫り着くまでの生涯にわたる歌
の旅を追跡する「続」長塚節論 一三〇〇円

写真資料 中島敦

田鍋幸信編 夭折した「山月記」「李陵」の作家の、幼年時代
成績表、タカ夫人との手紙、創作ノート、日記、未公開草
稿等、貴重な資料250点を収録 予8000円

定価九八〇円

ユリイカ五月臨時増刊 好評発売中
巖谷國士責任編集 加納光於装

総特集*ダダ・シュルレアリスム

巖谷國士／東野芳明／針生一郎／海野弘／有田忠郎
田中淳一／利光哲夫／与謝野文子／四方田犬彦／川崎渕／木村栄一
ブルトン／アルトー／ジード／リヴィエール／アラゴン／ドーマル／アルキエほか

特集
世界文学入門
この十年間の動向をさぐる

ユリイカ1981年10月号目次

七〇年代のアメリカ文学	志村正雄	52
七〇年代のイギリス文学	出淵 博	62
七〇年代のフランス文学	滝田文彦	82
七〇年代のドイツ文学	丸山 匠	90

世界文学の現在

腐 果	中井英夫	158
傷 痕	小佐井伸二	166
かぐや姫に関するノート	矢川澄子	34
くもの糸は走り	田村隆一	16
木 霊	金井 直	22
わたくしの名前	辻 征夫	24
回 帰 する 風 景	多田智満子	19
凌 辱 の 日 々	小長谷清実	32
結 婚	青木はるみ	27
詩 偽 書	安野光雅	40
起承転結・10 ブレンドルの演奏から	竹西寛子	12
耳目抄・29 ジョニー・アップルシード	亀井俊介	8

ユリイカ七月臨時増刊 好評発売中

定価七八〇円

総特集＊少女マンガ

対話Ⅱ吉本隆明／萩尾望都

大島弓子論／山岸涼子論／樹村みのり論／池田理代子論／竹宮惠子論

萩尾望都論／倉多江美論／吉田秋生論／やまだ紫論／青池保子論／高野文子論ほか

うずくまる陰影のための習作

粒来哲蔵詩集

具体的なものと思弁的なものとのせめぎあい、新たな言葉のエロスの世界を切り拓いてゆく。散文詩の、さらにけわしい高みへ進む注目作。 三〇〇〇円

駱駝譜

入沢康夫詩集

一見すると単なる言語曲芸や知的遊戯のように見えてしまふけれど、実はそれぞれが親しい友人や敬慕する故人たちに贈られた悲歌なのである。 一五〇〇円

こぶしの花

高田敏子詩集

なにげない日常の出来事をじっと見つめ、そこから透けて見えてくる人生の真実を、やさしい言葉と美しい表現でもって、日記風な詩に。 一三〇〇円

流刑地にて

北森彩子詩集

自分の心のなかに、いつも、真実の故郷を探し求めていくものがある。ゆれうごくその心を大胆なイメージとたしかな文体で詩に定着させた。 二〇〇〇円

千代田区猿樂町2-2-5興新ビル605

花神社

☎291-6569 振替東京2-194949

思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町3-15
電話267-8153(営)振替東京8121

新刊

悪の花 北村太郎詩集

この時代に生きて思考することの根源を見つめ、「悪の花」の三文字に想念とイメージを絡ませようとして、奔放にまた過激に自己をそこに反映させる意欲作30章。 二四〇〇円

水分の移動 鈴木志郎康詩集

詩が身振りとして捉えられてしまうことへの危機意識をもち、自分と他人の存在感を確かめようとして言葉投げつけて、そこに書くことの意味を追求する新詩集。 二四〇〇円

荒川洋治詩集

現代詩文庫75

現代詩の新鋭を代表する著者の「娼婦論」「水駅」「あたらしいぞわたしは」「醜仮座」などこれまでの全詩篇と短篇と評論・エッセイ多数。論||岡庭昇・井坂洋子他。 七八〇円

超自然と詩

フランス文学と日本文学 佐藤朔

日常の中に超自然が、古典や伝統の中に現代性がひそんでいる。仏文学者が芭蕉の「不易流行」をひっさげ、古今東西の美術や文学を逍遙する待望の詩と詩人論。 二二〇〇円

黒田三郎日記 全10巻

戦中篇Ⅰ

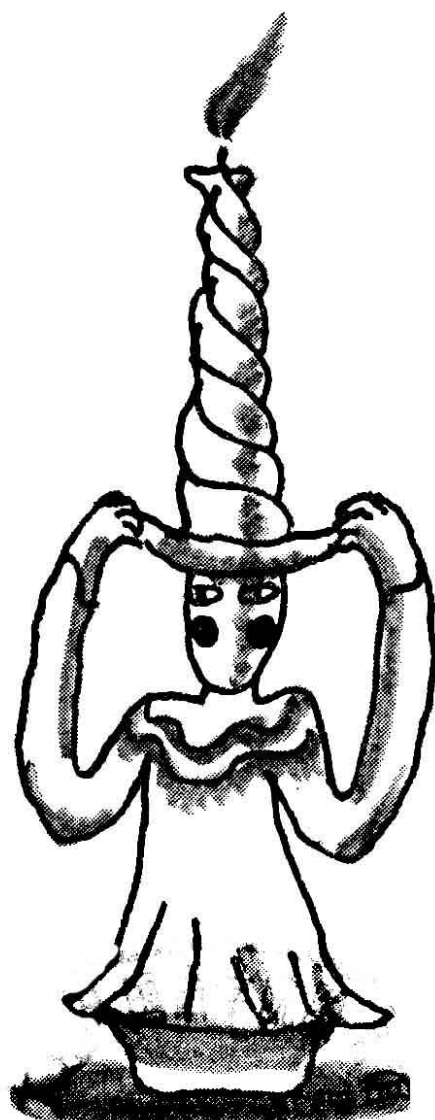
20歳の著者の矜持と自虐に満ちた青春の記録であり、社会史としても興味深いドキュメント。付||戦中詩篇。 二四〇〇円

詩の読解 思想と幻想

好評3刷 鮎川信夫 吉本隆明 各二〇〇円

ユリイカ

EUREKA／詩と批評



1981 **10** VOL.13-12

青土社

アメリカン・ヒーロー物語 ● 10

ジョニー・アップルシード

亀井俊介

アメリカの聖者

十九世紀のはじめ、アリゲニー山脈を越えると、アメリカはまだフロンティアに近かった。開拓者たちは苦勞して山脈を越え、粗末な建物の並ぶピッツバーグにたどりつくと、そこから平底船でオハイオ川を下り、新しい運命を求めて、オハイオやインディアナ地方の荒野にちらばっていった。(オハイオが州になったのは一八〇三年、その西のインディアナが州になったのはようやく一八一六年のことである。)

その頃、そのオハイオやインディアナを歩きまわる風変わりな男がいた——ということになっている。コーヒー袋に首や手とおす穴をあけただけのボロ服をまとい、頭に粥なべをかむって帽子とし、顔はひげば

うぼう、足はすねまでむきだしのはだしである。そして肩にずだ袋を背負っていた。なかにはリンゴの種子が入っている。彼はそれを人々にくばりながら、バイブルを読み、神のお告げを語って歩いた。インディアナは自分たちの土地を奪う開拓者を激しく憎んでいたが、彼にだけは敵意を示さず、むしろ暖かく迎えた。動物たちも彼の仲間だった。小鹿がつき従い、熊も彼の前ではおとなしくねそべった。彼は栗鼠や兎や小鳥と話をした。

この男、人々はジョニー・アップルシードと呼んだ。アップルシードとは、いうまでもなく「リンゴの種子」の意味である。彼を聖フランチェスコにたとえる人もいた。動物たちと愛の心をもつてまじわったから

だろう。日本人なら、弘法大師にたとえるかもしれない。全国を行脚し、さまざまな善根をほどこし、人を救ったあの弘法さまである。

しかしジョニー・アップルシードは、まぎれもなくアメリカ人の特色をそなえていた。彼には「聖」などという称号もなければ、「大師」でもない。教団を創始もしなければ、大寺院を建てて新しい宗派をはじめもしなかった。リンゴという実益のある果物を荒野にひろめていった、素朴で土くさく独立独歩の野人なのである。

荒野のリンゴ

ここで、リンゴがアメリカ人にどんな意味をもつ果物であったかを、ちよつと述べておいた方がよいだろう。それは、オヤツやデザートとして生まで食べることに知らぬ私たちにほとんど想像もつかぬ、生活の必需品であった。「アップル・パイのようにアメリカ的」as American as apple pie という言葉がある。またアップル・パイには「完全な」という意味がある。このパイをほかのパイに代えることは難しい。アップル(リンゴ)のパイであってこそ、それはアメリカ的であり、完全

を生み出すものなのだった。

開拓時代の荒野で、リンゴは最も便利な食料だった。まず第一に、それは寒冷な地方でよく育った。しかも夏に実る早生から晩秋に実る晩生まで、さまざまな種類があり、後者は樽につめたり、地下に埋めたりすると、新鮮なままで冬を越した。切って乾燥し、ひもでつないで天井からぶら下げ、必要に応じてアップル・ソースを作ることでもできた。新鮮なリンゴからは、アップル・バター、アップル・チーズなども簡単にできた。食料保存技術が発達していない時代には、これはいへん有難いことだった。

残ったリンゴは、圧搾してアップル・ジュースにした。それが発酵すると、アップル・サイダーになった。(サイダーといっても、日本で意味するような炭酸清涼飲料ではない。軽いアルコール飲料である。)初期のアメリカでは、サイダーは生水のような病気の恐れがなく、保存もきくところから、今日の飲料水、ミルク、ジュースなどをひくくるめた役割を果たしていた。そしてチェリー・サイダー、ピーチ・サイダーなど、いろいろなものがあつたが、いつしか、サイダーといえばアップ

ル・サイダーを意味するようになった。今日でもそうである。アップル・サイダーを蒸溜したものは、アップル・ブランデー（またはアップル・ジャック）になった。またアップル・サイダーをもとにして酢が作られ、味つけや保存（ピクルをつけるなど）の基本的な材料になった。

リンゴを材料にしたいろいろな菓子や料理については、ここでは述べないことにしよう。

リンゴは、またお金の代わりにもなった。辺境の開拓地では、貨幣が不足しており、物々交換が盛んだった。そこでは、リンゴや酢は最も交換の容易な品物だった。とくにオハイオ地方のアップル・ブランデーは、ケンタッキー地方のバーボン・ウイスキーと同様、遠くミシシッピ―河口のニュー・オーリンズまで運ばれて、貴重な収入をもたらした。さまざまな地方で、リンゴの木を植えることが土地の所有権を獲得することにつながった。オハイオ地方への入植を推進した「オハイオ会社」は、一七九二年、入植者が百エーカーの土地を獲得するには、三年以内に五十本以上のリンゴの木と二十本以上の桃の木を植えることという規

定を設けたという。

ウィリアム・カレン・ブライアントは、「リンゴの木を植えつけ」（一八四九）という詩を書いている。それはリンゴのこういう実際的な意味より、むしろリンゴの木がもたらす詩的な喜びをテーマにしたものだが、なおかつ、リンゴの木を植えることはアメリカの文化を植えることだという思いを、全体にあらわしている。リンゴとは、アメリカ人にとってそういうものだった。ジョニー・アップルシードという人物の意味するものも、アメリカ人にはたいそう大きかったといわなければならない。

ジョン・チャップマン

このジョニー・アップルシードは、ほんの少し後からやはりアメリカ北西部に現われたことになっている。あの巨人のきこりのポール・バニヤンと違って、実在の人物であつたらしい。本名をジョン・チャップマンという男だった。そして果樹園または苗木畑の経営者だった。

こまかな点になると、文献によって記述はまちまちである。マサチューセツ州の生まれという点では、たいいていの文献が一致しているが、

ボストンという説もあれば、スプリングフィールドという説もある。生まれた年もさまざまだ。いや、名前からして、ジョンではなくジョンナサンだという説もあるくらい。そういえば、リンゴの有名な商標名に、「チャップマン」と並んで「ジョナサン」というのがある。

だが、この実在の人物についていままでのところ最もくわしい研究をしたと思われるロバート・プライス著『ジョニー・アップルシード——人と伝説』（一九五四）によると、ジョン・チャップマンは一七七四年九月二六日、マサチューセツ州レオミニスターに生まれたという。土地の図書館の司書が、一九三五年頃、その誕生記録を発見、家系なども跡づけたらしい。そして一九四〇年には「マサチューセツ果樹栽培業者協会」が、チャップマンの家の跡に小さな記念碑を立てた。ただしこのジョン・チャップマンには、成長期の記録がほとんどないという。とすれば、彼がのちのジョニー・アップル伝説のもととなったジョン・チャップマンと同一人であると、どうしても断定できるのか、私にはいささか心もとない。しかしまあ、こういうことは、現地の学者の説を素直に

うけたまわっておくよりほかに仕様がなない。

出生のことはともかくとして、一七九七年、ジョン・チャップマンなる人物が、ペンシルヴェニア州の辺境に姿を現わした。これについては、はっきりした記録があるらしい。先の説が正しければ、彼は二十三歳ということになる。そして苗木畑にするための土地を買った。ロバート・プライス氏は、その後のジョン・チャップマンの行動を詳細に跡づけている。氏によると、彼は常に「安い土地」を求めて移動した。そして十九世紀に入ると、ペンシルヴェニアの西のオハイオを広範に経めぐり、さらにはインディアナへと舞台をひろげて、土地を買い、つぎつぎと苗木畑をつくった。そして一種のチェーンを経営をした。プライス氏の計算では、彼は生涯に少なくとも二十二箇所、千二百エーカーの土地を所有したらしい。精力的な経営者だったに違いない。

当時、リンゴの栽培が生活に密着した重要な産業であったことはすでに述べた。しかし、リンゴを種子から育てることは、多くの失敗をともなう、難しい仕事だったらしい。従って苗木を植えることが望ましいの

だが、苗木を東部から運んでくることはほとんど不可能に近かった。そこでジョン・チャップマンは、東部から種子を運んできて、自分の苗木畑にまき、育った苗木を人々に売ることを家業としたのである。

ジョニー・アップルシードは、西部にはじめてリンゴの種子をひろめた人ということになっているが、それは真実ではないらしい。さまざまな開拓者が、苗木畑を営んでいた。だが、プライス氏によると、ジョン・チャップマンの苗木畑のユニークな特色は、それが「フロンティアとともに移動する」ことだった。つまり彼は、いつも開拓者たちの最前線にあつて、苗木を提供したのだ。

苗木は、いったん根づけば、それにつぎ木や芽つぎをして、よりよいリンゴを生み出すことができた。チャップマンの苗木畑から、無数のリンゴの木が育つことになった。そしていつしか、現在のオハイオ・インディアナ地方、いやアメリカ北西部地方全体のすべてのリンゴの木が、チャップマンの種子から生まれてきた、ということに伝説ではなつてしまった。

斥候と宣教師

フロンティアの土地をたがやし、苗木畑や果樹園をつくり、移動してまわることは、たいへんな体力と気力が必要とすることであつた。それをなしたジョン・チャップマンは、自分の住む土地に精通し、人々の信頼を集めた人でもあつたらしい。

ジョニー・アップルシードがインディアンと仲良しだったという話は、どこまで根拠があるのだろうか。ジョン・チャップマンの生涯で最も派手なエピソードは、彼がインディアンスカウトの攻撃から白人開拓者を守る斥候スカウトのような役を果たしたことである。そして奇妙なことに、それもまたジョニー・アップルシード伝説の一つとなつていく。

一八一二年、アメリカはイギリスと戦争をはじめた。一八一四年の末まで続いたが、一般に「一八一二年戦争」と呼ばれている。この時、辺境のインディアンスカウトの多くは、好機到来とばかり、アメリカ人の開拓地に攻撃をしかけてきた。

当時、オハイオ州の辺境に住んでいたジョン・チャップマンは、近所の人たちから、インディアンスカウトの情勢をさぐって、危急の際は知らせることを頼まれていた。一八一二年八月二十一日、彼は斥候から帰って、

大声で人々に告げてまわつた——「いのちがけで逃げる——カナダ人〔英軍〕とインディアンがヒューロンに上陸中だぞ！」大混乱が起こり、人々はおよそ二日間、雨の中を夢中で逃げまわつたという。ただし、このニュースは誤報であることがわかつた。

九月には、マンスフィールドという土地のチャップマンの苗木畑の近くで、白人がインディアンに殺される事件が起こつた。開拓者たちは、インディアンによる大虐殺がはじまつたと思ひ、あわてて防塞ブロックハウスに逃げこむとともに、助けを求め、あわせて警告を伝えるための伝令を、三十マイル先のマウント・ヴァーノンまで出すことになつた。その危険な役を引き受けたのが、ジョン・チャップマンだつた。夜中に、彼は馬で駆け通したらしい——のちの伝説では、はだしで走つたことになっている。ともあれその姿は、多くの人によつて、独立戦争勃発時、英軍の襲撃をアメリカ人に告げてまわつたポール・リヴィアのように勇ましく語られていく。ただしこの時も、インディアンスカウトの襲撃は誤報であつたのだ。

ジョン・チャップマンが、こ

う勇壮な活躍をするともに、神の教えを説いてまわる敬虔な人であつたことも、また事実らしい。その面での彼の活動の記録は、一八一七年、つまり彼が四十二歳になつてから現われる。ただしその布教の仕方にも、開拓者らしいたくましさがあつたように思われる。

ジョン・チャップマンは、スウェーデンボルグの思想を奉ずる「ニュー・チャーチ」（より正しくは「ニュー・ジェルザレム・チャーチ」）に共鳴し、その教えを開拓地の人たちにひろめようとしていた。チャップマンのそういう行動にふれた最初の記録からして、彼を「まことに驚くべき宣教師」と呼んでいるが、それは彼の風采の異常さを指すよりも、むしろ彼の情熱の激しさを指す言葉であつただろう。

「ニュー・チャーチ」は、アメリカではまだ発足して間がなかったから、チャップマンは西部ではほとんど最初の信者であり、アメリカ全体でもごく初期の一人だつたといつてよい。彼は宣教のためにくぼる本（といつてもパンフレットのようなものだろう）を教会からもらうため、自分の土地を代償として提供するといった提案をしている。その土地に

新しい教会が建てられたり、大学ができたことすら夢見ていたかもしれない。

だがジョン・チャップマンの宣教は、じつさいにはそれほど大きな成果をもたらさなかったようだ。当時この地方には、ありとあらゆる教派が勢力をひろげてきていた。開拓者は日頃とてつもなく困難にみちた生活強いられていた。そのつらい日

常生活からの逃避を可能にしてくれる教えなら、彼らは簡単に信者になった。ところがスウェーデンボルグの神秘的な霊肉二元の教えは、文盲の人すら多かった一般の開拓者には難しすぎたのだ。「人々は……ニュー・チャーチの教義にほとんど注意を払わなかった。それは正統的でもなければ大衆的でもなかった。そして老ジョニーはからかわれた」とい

う同時代人の証言がある。それでも、チャップマンの努力により、一八二〇年から四〇年にかけて、オハイオ地方に相当な数のスウェーデンボルグ協会ができたらしい。

ジョン・チャップマンは、一八四五年三月十日ないし十一日に、インディアナ州フォート・ウェインで死んだ。彼を埋葬した場所（と考えられる所）には、いま墓石が立てられ、あたりはジョニー・アップルシード記念公園といったものになっている。

伝説の誕生

ロバート・プライス氏が語ってくれる實在のジョン・チャップマンはいこういう人であった。開拓時代の民間人の記録は、非常に乏しいのが普通である。それを綴り合わせて三百ページほどの伝記にまとめたプライス氏の苦勞は、たいへんなものであったに違いない。だがとにかく、それだけの伝記を可能にする記録が残っていたということは、ジョン・チャップマンが生前からかなり特異な人として注目されていたことの証拠ともなるだろう。

しかし、私にとって目下の関心の



▲伝説的ジョニー・アップルシードの姿（リチャード・ベネット画）
(Heroes, Outlaws & Funny Fellows of American Popular Tales, by Olive Beaupré Miller) 42

対象は、架空の、といって悪ければ伝説化し、ポピュラー・ヒーローと化したジョニー・アップルシードの姿である。ジョン・チャップマンの生前から、ジョニー・アップルシードの噂はしだいにひろまっていた。プライス氏によると、はじめのうちは肉体的な力強さが中心になっていた、開拓者の実態に近いものなのだ。だがしだいに、リンゴの普及や、風変わりな風貌や、センチメンタルな生き方が、主要な話題となっていた。彼の若い姿は背後にしりぞき、生まれながらの老人の姿が前面に押し出されてもきた。彼が生きた時代も、ほとんどひろまった。

アメリカのポピュラー・ヒーローの中で、ジョニー・アップルシードはまことに特異な存在である。平和な聖者のヒーローなんて、アメリカではほかに見つけることが難しいのだ。しかし彼もまた、アメリカ人の夢の化身であった。そして後には、サンドバーグやヴェイチェル・リンゼーといった土着派の詩人たちが、好んで彼を詩にうたっている。伝説的ヒーローとしての彼の面影は、もう少しくわしく追跡するに値するだろう。

ブレンデルの演奏から

竹西寛子



九月八日の夜に、東京文化会館でアルフレッド・ブレンデルのピアノ演奏を聞いた。曲目は、モーツァルトの「ソナタ イ短調K・三一〇」「シューマンの「幻想小曲集作品一二」「子供の情景作品一五」 ベートーヴェンの「ソナタ第一三番変ホ長調作品二七一一」「ソナタ第一四番嬰ハ短調作品二七一二」「月光」。

楽譜を見ながら演奏を聞いたわけでもないのにこんなことを言うのもどうかと思うが、当夜の演奏に感じたブレンデルの音楽のスケールの大きさは、自己顕示よりも楽譜の正確な読みを志向している演奏家が、ひたすらより正確な読みに己れを投げ出したとき、それとひきかえに得る音楽の属性のようなものかもしれない、などということは今考えている。

ブレンデルがその演奏から感じさせた精密は、演奏者の恣意というものが、一体どこまで許されるものであるかについて、音楽の専門家ではない一鑑賞者にまで自然に考えさせる性質のものであった。けれども、その精密は、聞き手を息苦しくもさせなかったし、第一、ブレンデル自身少しも不自由そうではなかった。むしろ、恣意を極力しりぞけて曲そのものの中に己れを碎き、その自由によって全的に生かされるよろこびをよろこびとしている人のようになめられた。

こういう演奏を受身の演奏というのは当るまい。浅い次元での小さな自己顯示、つまりそれさえ曲の「解釈」というなら、そうした「読み」の短命は何よりも時が証すだろう。私がブレンデルの演奏の精密から思ったことは、たとえさし当っては受身のように聞かれる穏やかな演奏であっても、楽譜を尊重する音楽性の高い演奏家に限って曲と主従の関係にはならず、必ず彼自身の作品の作者として起ち、その演奏は消極的どころかむしろ彼の音楽のスケールの大きさを感じさせるようになるのだらうということである。

演奏家として自立していない者がいくら原曲への忠実を真似ても、作品としての演奏は望めないし、こういう場合聞き手の印象は、まず白々しいか鬱陶しいかのどちらかになってしまう。私が自立というのは、演奏家としての経済的な自立を言っているのではない。音楽家としての自我をもっている者が、自己放棄の姿勢でひたすら原曲に身を寄せていくことがいいのであって、天の声は、自我が無くても、又自我に執していても聞えないものらしい。

曲を曲のように生かして演奏するよろこびが、創造に参加するよろこびでもあることを納得するには、我執は妨げと思われる。演奏経験の蓄積も必要だろう。しかし一旦そのよろこびを知った者は、さらにすすんで、演奏における自己放棄を志すのではないだろうか。作品としての演奏とこの自己放棄との関係には、創造をめぐる大事がたくさん詰まっているように思われる。

平安時代の宮廷貴族のたしなみの一つとして音楽がもとめられていたのは知られる通りであるが、それは、鑑賞能力と演奏能力との双方を兼ねることが望ましかったわけで、当り前といってしまえばそれまでだが、さすがに理にかなっているというより情理にかなった要求、理想だった。

「三舟の才」を伝えられる四条大納言公任などまず代表的な該当者だったかと想像されるが、作品の中に例をさがせば、すぐれた音楽鑑賞者であって同時に又すぐれた演奏者として描かれている一人は光源氏で、この物語の中では、源氏ほどではなくても、主役、準主役級の人物は折あるごとに楽器を奏で、人生と音楽について、あるいは演奏というものについての感想を語り合う仕組みになっている。ただし演奏者といっても、今日

でいう演奏の専門家のことではない。

源氏の物語の作者が、和泉式部を、こちらが恥ずかしくなるような歌詠みではないと批評した、その「紫式部日記」で、作者は和泉式部を正統な歌詠みとは認めないと公言しているのだが、その理由として言っていることがおもしろい。

「もののおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそはべらざめれ。」

和泉式部とは手紙のやりとりもあった。その歌もおもしろいと思う。「歌は、いとをかしきこと。」それも口にまかせて詠み出したものなどに必ず興をひく一ふしがある。「口にまかせたることどもに必ずをかしき一ふしの目にとまる詠み添へはべり。」そういう人ではあるけれども「もののおぼえ、うたのことわり」になると、というのが紫式部の立場で、このような批判のし方、またこのような認め方をするのが「源氏物語」の作者だと思う。

「もののおぼえ」というのは古歌についての知識であり、「うたのことわり」というのは文字通り歌の理論、歌の分析、帰納、評価にかかわる能力をさすのであろう。この指摘に関する限り、歌の実作者は、同時に、歌の有識者、論者としても正統な習学を積んでいなければならないという日記作者の考えは明らかで、こうしたことから、紫式部が、文学の正統を行く者として「源氏物語」にかけた意欲と自負のほどがしのばれる。

それにしても、「もののおぼえ」「うたのことわり」の面からみると「まことの歌詠みざま」ではないという指摘は、和泉式部に対する批判としてだけでなく、創作にかかわる者への言葉としても衝くべきところをついている。情理いずれをもおとしめぬ作者らしい発言で、演奏にも頭脳経験の深さを求め、鑑賞にも、肉験経験の必要を思っていたらしい紫式部はここにもいる。知識だけでも理論だけでもなく、その双方を、実際の読み書きと並べて創作者の必須条件とした女性が千年の昔に生きていたという事実に関心される。

「源氏物語」に限らず、平安時代の日記物語を読んでいると、舞楽や雅楽の曲名をよく知らされる。

ただそれは、大抵の場合、然るべき場に必要な音楽として曲名を知らされるか、舞人や演奏者の描写ないし

は観客や聞き手の反応の描写であるから、私など、日記物語を読みながら、かつてそれらが演じられていたように見聞きすることはほとんど不可能である。今日まで伝えられている舞楽や雅楽のうちのごく限られたものについては、多少の視聴覚の記憶を動員して読むことはできる。できるとしてもまことに微々たるものであって、曲名や曲についての後人の解説では、日記物語の中の音楽は読めないも同然である。つまり「ものおぼえ」だけでは、その部分は素通りになってしまう。

この春、三月二十二日であったが、NHKのFM放送で、小泉文夫氏が中心になってすすめられた番組「シルクロード・音楽の旅」は、そのような私には大変有難い番組であった。春日大社南都楽所の笠置保一氏の話もまことに有益だった。

その日は主として、管楽器（正倉院の横笛、能管、韓国の大琴、正倉院の尺八、イランのネイ、雅楽の笙、中国の芦笙、正倉院の甘竹簫、ルーマニアのナイなど）弦楽器（正倉院の四絃琵琶、楽琵琶、西アジアのウード、正倉院の五絃琵琶、ウイグル族のレワープ、インドのサロット、雅楽の箏など）の演奏や音色を取り入れた話だったが、シルクロードのほとりの音楽を、このように話と演奏で提供されると、単なる「ものおぼえ」から、わずかながら歩み出させてもらえるところが嬉しい。

今こう書きながら、この夏、西安の鐘楼から見下し見渡した東西南北への路を思い浮かべている。提供されればこれ又当り前のように聞く「シルクロード音楽の旅」だが、制作のご苦労へはいくら感謝してもし過ぎることにはならないだろう。あの番組を支えている長い年月と人間の非凡な作業を軽くみてはなるまい。

その番組で、はじめて管子の演奏を聞いた。演奏者の名前は忘れたが、NHKの招きで来日した中国放送民俗楽団の団員ということだった。曲名は「川の流れ」。聞きながらトランペットの哀切も思った。金管ならぬ中国の箏はむろん音もつとまるい。まるいからいっそう泣きたくなるような音色だとも言える。それひとつの演奏と、それにまつわる話を聞いただけでも忘れられない番組である。

くもの糸は走り

老醜讃歌

田村隆一

晩節を汚したい

美しくない老年を迎えたい

心が騒ぐのなら

まだ駄目だ

盗作 剽窃 改変

二番センジ 三番センジ

一度でもいいから

やってみたい

カミの声

(おまえの作ったものは

みんな そうじゃないか)

オソレ イリヤ ノ キシモジン